光差す明日を

南風原町立南風原中学校三年　大城　ゆず

南から吹く風が私の頬を撫でるとき
ふぅーと息を吐き
穏やかな日々を過ごせていることに
感謝する

父、母、祖父、祖母
何代も何代も
命を繋ぎ
今、私がここにいる

沖縄の祖父母も
山梨の祖父母も
戦禍を生き抜いて
命を繋いでくれた

ほんの少しの運命の違いで
私は存在しなかったのかもしれない
祖父の父は
戦争に行ったきり
二度と帰ってはこなかった
祖父はあまりに幼かったため
父の顔は覚えていない
父の手の温もりさえも…

祖父はただ
当たり前の毎日を
過ごしたかっただけなのに
そして、ただただ
父の顔を覚えるまで
笑い合っていたかっただけなのに

今から七十七年前の沖縄
月桃の香りただよう
私の通学路は
猛烈な爆撃によりおぞましい光景となり
私がいつも見ている青く澄んだ海は
おびただしい数の人々の血で黒く染まった
私が見上げるこの空は
恐怖の色に変わり
絶望の底へと落とされていく沖縄を
どんな思いで見つめていたのだろう

私の目に映る
「当たり前」の景色は
銃弾と叫び声が轟き、人々が逃げ惑う
そんな非日常の「アタリマエ」となった
太陽の香り残る布団で目を覚まし
母のにぎるおにぎりをほおばりながら
テレビに映る遠い国の戦争の映像を見る

七十七年前の
沖縄が
そこにもある気がする

今この世界のどこかで
戦争をしている国
そして
今まさに
戦争をしようとしている国
たくさんの犠牲者を生み出すことで
何が生まれるというのか
争う事でしかなぜ答えを導き出せないのか
破壊や暴力
そんなもので人々の心は
支配できないというのに
生まれてきた命を
なぜ大切にしようとしないのか
なぜ同じ過ちを何度も何度も繰り返すのか
戦争が
世界をよくすることなどないはずなのに

世界のどこかで起きている悲しみから
私は目を逸らさない
沖縄で起きた悲しみを
私は忘れない
世界がまた闇に包み込まれていかぬよう
私は伝え続ける

南から吹く風が私の頬を撫でるとき
私は
ふぅーと息を吐く

光ねむる明日を
私は生きる